

令和5年度 第2回京丹後市の新たな教育・人材育成の在り方に関する検討会会議録

1 開催日時：令和5年6月5日（月）13時30分～16時00分

2 開催場所：京丹後市役所大宮庁舎 第2・3会議室

3 出席者：

浅井 智美 委員

井上 知英 委員

今度 義則 委員

岩本 悠 委員

岡田 泰行 委員

荻 弦太 委員

古賀 稔邦 委員

高橋 一也 委員

田茂井 勇人 委員

竺沙 知章 委員

長井 悠 委員

中川 哲 委員

牧野 光朗 委員

ヤング 吉原 麻里子 委員

塩川 達大 オブザーバー

田中 努 オブザーバー

事務局：

京丹後市副市長

濱 健志朗

京丹後市教育委員会 教育長

松本 明彦

京丹後市 市長公室長

川口 誠彦

京丹後市教育委員会事務局 教育次長

引野 雅文

京丹後市市長公室 政策企画課長 松本 晃治
京丹後市教育委員会事務局 学校教育課長 川村 義輝
京丹後市教育委員会事務局 教育総務課長 西村 隆

4 議 事

- (1) STEAM 教育について
- (2) 地域連携・小中高連携、自治体の取組事例について
- (3) 少子化が加速する地域における高校の現状について
- (4) 福井県立若狭高等学校への視察報告
- (5) 論点整理②（教育内容・制度）
- (6) 子どもたちからの意見聴取の在り方
- (7) その他

5 公開又は非公開の別 公開

6 傍聴人 1名

7 要旨

(1) STEAM 教育について

ヤング委員：Society1.0 から 4.0 まで、それぞれの社会において必要とされていた人材があります。Society1.0 の狩猟社会では、身体能力に優れた人材。農耕社会では、集団で活動できる人材。工業社会では、精密で確実な作業ができる人材。情報社会では、エンジニアなど科学技術リテラシーが高い、STEM 人材。では Society5.0 に求められる人材とはどのような人でしょう。先に結論から申し上げます。ポストコロナ時代の、科学技術が急速に発達し先行きの見通しができづらい時代に求められるのは、物事の本質を見極め、全く新しい切り口で発想できる、そして何より人間を大切にする人材です。その鍵を握るのが、人間中心の科学技術アプローチ「STEAM 教育」という考え方です。この考え方は、いわゆる理系教育とは似て非なるものです。従来の理系教育はそれぞれが独立した科目として、別個に教室で学ぶものですが、STEAM 教育では理数系領域を

融合し生活に引き寄せることで生徒の学びを活性化させ、実社会に応用できる知識や技能の習得をうながそうという教育のアプローチです。

スライド 11 枚目の写真は、スタンフォード大学のあるパロアルトという町の公立小学校の放課後の様子です。小学校 4 年生の女の子がこうしてレゴを使って至極簡単なプログラミングで自分が組み立てたものを動かす、ロボット工学の基礎の基礎の基礎になる学習を体験しています。みんながみんな夢中になるわけではありません。でも中には、早く楽しく触れることで、こうした小学生の原体験をもとに、早期に楽しく STEM に触れることでエンジニアリングやコンピューター科学など STEM 領域に強い興味を示す生徒も出てくるわけです。

次の写真では、中学生になった先ほどの女子生徒が仲間たちと一緒に、中学生向けのロボット大会に出場している様子が見られます。シリコンバレーにありますが Google の本社で行われた地区予選の様子ですが、同社の職員や地元のエンジニアたちがコーチや審査員を務めています。こうして、地元の産業界を巻き込んで、人材育成のエコシステムが構築されているのがシリコンバレーの特徴でもあります。高校生向けの国際ロボット競技会の予選大会となると、会場はスポーツ競技さながらの活気を呈します。これは、2019 年にサンフランシスコの公立高校の体育館で撮影した写真なんですけれども、こうして大学に進学する前の生徒さんたちが楽しみながら、ロボットを組み立て、機械工学の手法を学び、またそれを作動させるコーディングを習ってコンピューター科学に触れ、またチームでコラボレーションしながら自分たちのロボットのアイデアをビジネスピッチしていく、アントレプレナーシップを学んだり、または材料費の予算取りをするチームがいたり、コスチュームをデザインするデザイナーのメンバーがいたり、様々な角度からロボティクスという学際的な領域を、仲間をつくりながら体験するわけです。中等教育に STEM の楽しさに触れる機会が織り込まれている、それがシリコンバレーの STEM 教育です。STEM 教育に重点を置いた国や産業界の取り組みは、少なくとも北米においては、ある程度の成果を上げている様子です。

こちらの表は 1966 年から 2015 年までの米国におけるサイエンスと工学領域の学位取得者数の推移を示したものです。ブルーが学士、赤が修士、緑が博士ですけれども、STEM 領域で学ぶ大学生の数が、学部では大きく増加していること

がわかります。2010年から16年の間に、米国のSTEM人材が47%増加したというデータも出ています。この実学重視のSTEM教育は、20世紀の初頭からも急速に世界に広がりを見せ各国が教育政策に取り入れているというわけです。日本でもご存知の通り、文部科学省の政策で2002年度からスーパーサイエンスハイスクールが設置されていますが、これもこの世界的な教育界の流れを汲んだ政策ではないかと理解しております。

ここからがいよいよSTEAMです。各国がSTEM教育に注力する中、アメリカの研究大学を中心に、最近さらに新しい動きがあります。それは、生徒たちの科学技術STEMリテラシーを高めるだけでなく、人間を大切にするヒューマニストとしての視点を育む視点を盛り込んでいこうとする動きです。そもそもなぜ自分はSTEMを学びたいのかという問いかけを、科学技術教育と同時進行で行おうという、STEM教育を超えたこの動きを、スカイロボの共同設立者でトロント大学教授の木島里江さんとともに、私はSTEAMと呼んで着目をしてきました。

具体的な事例を一つご紹介いたします。コロナ前、2019年の3月にスタンフォード大学に設置された、人間中心のAI研究所：HAIです。AIをめぐる研究は第三次ブームといわれているほどで、スタンフォード大学にもすでにいくつかの研究所が存在しています。そんな中、あえて人間中心のという枕詞付きのセンターが現れたわけなんですね。写真に写っているのが、HAIの共同ディレクターの2人です。さあ、彼らの専門領域は何だと思われませんか？人間中心のAI研究所を率いる2人のリーダーたちの専門領域は何でしょうか。私たちから見て右手におられます女性の方は、コンピューター科学者のフェイ・フェイ・リー教授です。人工知能に、人間のようなビジョン・視覚を持たせることで、コンピューターの深層学習を可能にしようという、全く新しい切り口で人工知能研究に取り組んだ、AI研究の権威です。画像認識技術を支えるデータベース、イメージネットを構築して、近年のAIブームの火つけ役とも言われる人物です。

コンピューター科学者のフェイ・フェイ・リー教授がAI研究所を率いるのは、ある程度理にかなっているでしょう。興味深いのは、その横に立つ彼女の相棒が、エンジニアでも、サイエンティストでもないことなんです。この男性はジ

ジョン・エッチェメンディ教授。哲学者です。言語の起源、言葉と思考の関係の専門家であり、2000年から17年間にわたってスタンフォードの副学長を務めた人物でもあります。STEM領域のこの人材が人工知能というSTEM最先端の領域で、リーダーシップを担っている。一見すると、腑に落ちません。しかし、このポイントこそが重要なわけなんです。HAIの目的は、AIをめぐる議論や研究の裾野を広げていくことにあります。最近日本でもChatGPTがメディアを賑わせていますが、人工知能があらゆる人間の生活に広く、そして深く影響をおよぼしている今、最先端の技術を巡る倫理感を議論するために設置されたのがHAIなんです。そこで交わされているのは、科学技術に、社会正義や人間の幸福という切り口を踏まえながら、未来のあり方を見つめた議論です。本当に人のためになるAIとは何か。これからのAIのあり方とは何か。HAIにはSTEM領域の専門家だけではなく哲学、歴史、政治、文化人類学、経済学、ヘルスケア、ジェンダー学など、多様な領域の専門家が集まり、様々な角度からこれからの人材育成のあり方を議論しているというわけです。スキルの育成に主眼を置いたSTEM教育を今一度見直して、ヒューマニストテクノロジスト、人間を中心に発想するSTEM人材を育てていこうという新しい動き、これが私たちが考えるSTEAMというアプローチです。

会場の皆様、事前課題に少し取り組む機会があったという方はどのくらいおられるでしょうか。グア・ワン教授のTEDを見ていただきましたが、彼はスタンフォードでコンピューター音楽を専門にしている研究者です。できれば、1人、2人で構わないので、簡単に感想をシェアしていただければとてもうれしいです。課題にも書きましたけれども、正しい答えというものは全くありませんので、ぜひ自由にご発言いただければうれしいと思います。TEDを見て、どんなことを考えられたか、感想を本当に一言でご発言いただければと思いますが、いかがでしょうか。

委員：大変興味深い映像だったと思います。新しい音楽というか、コンピューターミュージックとは何かみたいなことじゃなくてですね、もっと何か広い、新しい芸術みたいなんですね、何か本当にSociety5.0以降の、長い歴史があった芸術が全く変わってくる、そんな感じの印象を受けました。

ヤング委員：ありがとうございます。音楽とか技術を越えてもっと何か広いところにつな

がっていくような印象を受けたという古賀委員のご発言でした。もう1名、どなたかの感想をぜひ伺ってみたいですがいかがでしょうか。

委員：映像見さしてもらいまして、コンピューターだけで作られる音楽は非常に無機質だったんですけど、最後オーケストレーションですかね。五、六名で、実際、人間の方が演奏された時に、無機質な音楽ではなくて、すごい宇宙を感じるというか、広い、何か人間味を感じる音楽に変化したのがすごい興味深かったです。

ヤング委員：ありがとうございます。コンピューター言語を生み出してしまうほど極めて高度なスキルを有するグア・ワンですが、おっしゃる通り、彼が生み出すテクノロジーには、高度なスキルや蓄積していた知識を超えた何かがあるという印象を受けた方がおられるのではないかと思います。ちょうど1ヶ月前に私が担当した工学部大学院の授業で、学生さんたちがシェアされた意見をこちらのスライドに載せてみました。航空宇宙、電子工学、土木工学、材料システム、化学…ありとあらゆるエンジニアリング分野で学ぶ学生さんたちが集まるクラスで、様々な意見が交わされましたが、共通していたのは、この人間中心という印象を受けたというところだったんですね。STEM人材をSTEM人材たらしめるのは、グアの人間中心のアプローチだったんじゃないかなという意見が聞かれました。実際、グア自身がこう言っています。「重要なのは、人と人をつなげるためにどうやってテクノロジーを使うのか」。グアが開発した「オカリナ」というアプリは、ユーザーが自分についての情報を発信するためのものではありません。演奏者が誰なのかはさっぱりわからない。ただ、アプリを使って演奏している音の主がいる場所が地球儀上に光の点になって見えるだけ。しかしオカリナのメランコリックな音色に耳を傾ける人たちの中に様々な思いが沸き上がってくるわけです。何歳ぐらいの人が吹いているんだろうと。何でその時バッハを奏でたかったんだろうとか、どんなことを感じながら吹いていたんだろうとか。グアの生み出したテクノロジーというのは、わたしたちに解や答えをもたらすのではなく、むしろ私たちの中に問いかけを生み出す。グアは、こういった感情や答えのない問いかけこそが、私たち人間を人間たらしめていると彼は力説するわけなんですね。STEAM人材が生み出すイノベーション、本当に人の心を掴むようなテクノロジーというのは、こうして私たちが日々の生

活の中でふと立ちどまって、人間とか人生について考えるきっかけを与えてくれるものではないかと思います。こちらの写真はグァが立ち上げた楽団、スタンフォード・ラップトップ・オーケストラのコンサートの様子です。会場のホールは、これまでヨーヨー・マや五嶋みどりをはじめ、名だたる音楽家が音色を紡いできた、由緒正しき空間です。そこにこのノートパソコンを手にした演奏家たちが並んで、独特の奇妙な音色を披露する様子は、ともすれば異様ともいえるオーラを放ちます。STEAM 人材の活動は往々にして、突拍子もない。というのも彼らは常に固定概念を覆す発想をするからなんです。ヨーヨー・マが数百年の歴史ある楽器を持って演奏するこの舞台に、イケアのボールで作ったへんちくりんな楽器を持ち込んで、不可思議な音を醸し出すということは、通常ではありえない。でも有り得ないよねという社会の通念を破壊していく彼らの活動というものが、いわゆる「カイゼン」のようなインクリメンタルでなイノベーションではなく、新しい時代を生み出す破壊的なイノベーションにつながっていく潜在性を秘めているように思います。もう一つ、グァの突拍子のなさが現れているのが、彼が研究者としての成果とエンジニアとしての哲学を盛り込んだ著書「アートフルデザイン」です。3年の歳月を費やして2018年に出版されたテキストですが、何と合計1650枚もの写真で構成された全ページカラー刷りのグラフィックノベル、言ってみれば、漫画本なんです。スタンフォードのファカルティが自分の研究活動を漫画形式で出版したのは、スタンフォード大学出版の開設以来、初めてだったそうです。

STEAM 人材はまさに型に当てはまらない発想で、普段の「ありえない」を行動と実践に変えていくイノベーター、アントレプレナーだと言えます。STEAM 人材にとって自分の専門領域である STEM の専門性というものはあくまでもツールであって、目的ではない。彼らを突き動かすものは、最先端技術そのものではなく、人間につながりたい、人間を大切にしたい、人間であることを抱き締めていきたいというような心のありようです。スカイラボで大学生のデザインシンキングコーチさんたちに強調する点ですが、STEAM 人材たちの活動の根幹にあるものは、人への興味だと思うんです。だから必然的に、彼らは人間社会や世界をより良くしたいという思いに基づいて活動することになる。STEM の専門性だけではなく、こうした世界観をもった世代を育てることが、新しい社

会 Society5.0 に求められる教育のあり方ではないでしょうか。

I T業界に破壊的イノベーションをもたらしたスティーブ・ジョブスが、がんで他界する半年前、アップルの社員を前にステージから語りかけた言葉です。ー「テクノロジーはリベラルアーツと融合して初めて人の心を謳わせることができる。」ーSTEAM という概念が、彼のこの言葉に凝縮しているようにも思います。シリコンバレーで活躍する STEAM 人材の Aの部分に入るものは、単なるアートだけではありません。彼らと話をすると、彼らの考え方とか活動の根底に人間というものが中心にある世界感を感じます。高い専門性を日々研鑽するテクノロジストでもあり、さらに人間を大切に発想しようとするヒューマニストでもあることが、次世代に必要とされる STEAM 人材像ではないでしょうか。

こちらが最後のスライドです。ではどうしたら STEAM 人材を育成できるのか、それがこの検討会の議題でもあるわけですが、繰り返しこれまでも述べさせていただきましたとおり、スカイラボでは、イノベーター・アントレプレナーの STEAM 人材に共通する三つのマインドセットを Society 5.0 に求められる STEAM 人材像育成の鍵だと考え伝えようとしています。人間中心の発想法であるデザイン思考を英語で学ぶプログラムで、ユーザーさんのためにもものづくりをするという、人間中心のものづくりの楽しさを知っていただき、STEAM 人材の一步を踏み出すという教育プログラムです。Kyotango Sea Labo では、京丹後市の教育委員会の先生方と連携しながら、また、この町の産業を支えて活躍される方々にユーザーさんとしてご参加いただきながら、地域に密接に連携したプログラムを作り上げています。これは、STEAM 人材を京丹後市という地域で育てていくための最初の一步です。今後、私たちが推進する STEAM という考え方が、京丹後市の公教育に浸透していくことを心から願っております。本日はご清聴誠にありがとうございました。これで私のプレゼンを終わらせていただきます。

座長：どうもありがとうございました。ただいまご発表いただいた内容につきまして、どういふことも結構ですので、関心、少しわかりにくいと思われたところ、さらに知りたいと思えるようなところ、ご自由にご質問いただければと思います。よろしく願いいたします。

委員：デザイン思考の話なんですけども、別にそれ最近の話じゃなくて例えば 20 年

ぐらい前から例えばもともとMITのジョン・マエダさんとかは、結構数学の授業をどういうふうにしてやるのかとかそういう話をされてて、例えばジョン・マエダさんは一番最初に資生堂のホームページを作ってインタラクティブなホームページを作った方なんですけども。そういう教科の中にそういうデザイン思考の授業っていうのは、デザインとかアートの思考を取り入れるっていうのは昔からやってきたと思うんですけども。前回の時、提案したんですけど、環境の中にそのデザイン思考とかっていうのをどうやって組み込むかっていうのがすごいポイントだと思っています。例えば私の学校全日空だと、2016年の段階からもう中学の総合学習の時間を別にデザイン思考というもので扱ってそれで学校環境を変えてきたんですね。ポイントとして、何かそういう夏の間例えばSeaLaboみたいなそういうプログラムをやってデザイン思考みたいなことをやるんじゃなくて、例えば普通の授業からですねそういうふうなデザイン思考みたいな感じのことを取り入れることがすごく重要でして。そこら辺をどうやってこの京丹後市の教科の中にインテグレートしていくのか、ぜひそこら辺をこれからの教育委員会の方でもディスカッションしていただきたいなと思いました。

座長：どうもありがとうございました。具体的に今後、今後の進め方に含めてご意見をいただきたいなと思います。岡田委員、手を挙げていらっしゃるように映ったんですけども、いかがでしょうか。

委員：説明の方ありがとうございました。先ほどのSTEAM教育の実践ですけども、教育プログラムの研究とか開発というのは、どういうようなところが中心となって取り組まれていったのか、日本の場合だと、学習指導要領という全国一律の基準というものがあるんですけども、その辺りは実際どうだったのでしょうか。

ヤング委員：スカイラボと言う非営利教育活動を始めたのは2016年ですが、高橋委員ご指摘のとおり、デザイン思考は最近生まれたものではありません。ドイツのバウハウスというところが推進した哲学にもその源流を見ることができると考えています。その流れを発想のツールとしてペタゴジー化したのが、スタンフォードのデザインスクールd.schoolだったわけなんです。スカイラボでもd.schoolやシリコンバレーのヌエバなどが5つのステップとしてモデル化し

たアプローチを骨組みに使い、スタンフォード教育学大学院でデザイン思考を中等教育に応用する方法論を研究されているシェリーゴールドマン教授からアドバイスをいただきながら、独自のカリキュラムをつくりました。以来毎年ワークショップを行いながら、木島さんと一緒にこのカリキュラムを毎年実施し、日本の教育制度で学ぶ生徒さん、特に女子学生さんたちのニーズを鑑みながら、これまで大学や企業などをコラボレーターにむかえ、これまで8年間かけて、少しずつ改訂してきたわけです。毎年ワークショップを行っては参加者からフィードバックをもらって改良し続けて参りました。さらにワークショップの参加者の学習の様子をデータでとらえながら、得られる研究結果をさらにカリキュラムに活かしていく、エビデンスベースの教育を目指しています。京丹後市との連携で実施する Kyotango Sea Labo は自治体との連携で行う初めてのプログラムで、私たちも STEAM 教育を公教育に応用していくための術を開発していく機会をいただき、本当にワクワクしています。スカイラボがめざすのは、世界をもっと良い場所、もっとやさしい場所にするために、人を中心に発想して、人間に役立つテクノロジーやサイエンスを生み出すために科学技術領域でスキルを研鑽する人材です。京丹後教育委員会の先生方をコラボレーターとして迎えて、2年目となる本年度は昨年度からのフィードバックを元にカリキュラムに改訂を加えて、より京丹後という地域の特性を活かした STEAM 教育を目指していきたいと考えています。

座長：ありがとうございました。あともう1人ぐらいご質問いただきたいと思います。

委員：先生ありがとうございました。去年僕もその SeaLabo に参加させていただきまして、感想になるんですけども、最初に我々の仕事の説明を生徒さんにし出すことから始まり、参加していく中で、その生徒さんが日に日に積極的に参加されるというのか、取り組み出されていて、この丹後にこんなに積極的に英語を使いながらプレゼンできるような生徒が増えてきているというのが僕はすごく嬉しくて、感動しました。こういう生徒さんが1人でも丹後に増えていくということが、この地域にとってすごい大事なことだなと感じさせてもいただけた SeaLabo でした。また今年もあるということなのですごく楽しみにしていますし、先ほども言いましたように1人でもこういう生徒さ

んが丹後から出てきていただけたら、本当に丹後ってもっともっと素晴らしいところになるのかなと思っております。

座長：ありがとうございます。またいろいろご意見やご質問もあるかと思いますが、けれども、時間の関係もありますので、とりあえずヤング委員の STEAM 教育については、ひとまずこの辺りしておこうと思うんですが、私も感じたことだけ申し上げると、多分ポイントは、人間中心っていうことをどう考えるかということですし、STEAM ベースの話であって、リベラルアーツというものが当然ベースにあるということになるので、それは、京丹後市の学校教育でしっかり根づいているということが前提で、いろんな領域、進む形の人材育成につながっていくので、その中にテクノロジーとの関わりっていうところを中心に考えるってのが STEAM だなと感じたので、やっぱり考えるべきことは、ベースとしての、リベラルアーツ、人間中心ってことをどう考えるかという風な教育ができるということではないかと思っております。どうもありがとうございます。またこういう問題を議論していきたいというふうに思います。では次に進めたいと思います。議事の 2 の方は、地域連携と小中高連携、それから自治体の取り組み事例というところになります。これにつきましては、文部科学省の参事官補佐の白川様からご発表いただきたいということですので、どうぞよろしく願いいたします。

白川氏：本日はご説明の時間をいただきましてどうもありがとうございます。私、文部科学省の初等中等教育局で、高等学校担当の参事官付におります白川と申します。本日は私どもが担当している高校に関する施策についてご説明をさせていただきます。京丹後市さんは高校の設置者ではあられないと思いますけれども、高校の設置者でなくても、高校が立地する市町村というものは、本当にその高校の学びを充実させていく上で、非常に重要な関係者の一つだというふうに私ども考えております。加えて、小学校中学校が義務教育で、高校は義務教育ではないというふうに言われますけれども、今 99%に近い生徒さんが、高校に進学をしていくという中で、生徒の目線に立てば、小中高というのは地続きの存在だというふうに考えております。そういう意味では小中の施策を考えるということにあっても、地続きの高校でどのような施策やどのような取り組みが進んでいるのかということ、ぜひ知っていただき

たいなというふうに思っております。本日はそういった2点の観点から、前半は、私どもが進めております政策について簡単にご紹介するとともに、後半は、いくつかの学校さんの事例をご紹介できればというふうに思っております。1枚目でございます。私どもが令和2年の頃にまとめておりました、新しい時代の高等学校教育のあり方ワーキンググループ、実はこの京丹後市の検討会の委員の中にも、岩本委員や、牧野委員、実はこのワーキンググループにもご参加をいただいてご議論いただいたという経緯がございます。この令和2年のワーキンググループのまとめを踏まえてやっていることを二つご紹介させていただきます。一つが、スクールミッション、スクールポリシーでございます。実は京都府さんはこのスクールミッション、スクールポリシーを、令和5年度中に定めるというふうに計画されていると聞いておりますので、その前提になるんですけども、今、高等学校の設置者は、高等学校が、これから申し上げるスクールポリシーというものを策定するというこの前提として、各高等学校や、その立地する市町村などと連携をしつつ、それぞれの高等学校に期待される社会的役割、いわゆるスクールミッションということのを再定義をするということをお願いしております。加えて各高等学校さんに関しては、このスクールミッションということ踏まえて、つまり京都府立の高校さんであれば、京都府教育委員会が定めるスクールミッションを踏まえて、それぞれの学校、全日、定時通信制の課程または学科ごとにスクールポリシーを定めて公表するということをお願いしております。一つは、高校の学習指導要領に定めるところによって育成を目指す資質能力に関する方針。もう一つは、その資質能力を育成するために、どんな教育課程の編成、そして実施をするのかという方針。そして、そもそも入学時点で、生徒さんにどういったことを期待するのかという入学者の受け入れに関する方針。この三つの方針を定めていただくことになっております。つまり、その学校はどのようなミッションを持っていて、どんな人材の育成を目指して、どんな教育を行っていくのかということ言語化し、明確化していただくということをお願いしております。令和6年度末までに、そうしたことを進めていただきたいというようなところでお願いをしているところです。京都府さん、そして京都府立の各学校さんは令和5年度中にこれを定めていくとい

うことで聞いておりますので、この検討会においても、京丹後市内に立地する高等学校さんとの連携などを検討されるにあたって、是非、その高校のスクールミッション、スクールポリシーがどんなものかということについても、念頭に置いてご議論いただけたらというふうに思っております。このスクールミッション、スクールポリシー、もちろん各学校におけるカリキュラムマネジメントであったり、あるいは中学生がどの高校に行こうかなというふうに考える時の進路選択、こういったことにも、活用いただきたいというふうに思っているんですけれども、同時にその高校を取り巻く地域であったり、あるいは企業であったり、そういう高校を取り巻く、高校と連携協力していくような関係者の皆様の共通理解を図る上でも、役立てていきたいというふうに考えているところでございます。スクールミッション、スクールポリシーについては、以上でございます。もう一つは、普通科改革についてご紹介をさせていただきます。高等学校の学科に関しては、一般的に普通科と専門学科と総合学科、大きく3種類がございますけれども、大体この普通科に高校生の約7割が在籍をしてございます。ただ、普通科と一口に言っても、普通って何なんだ、と聞かれると、うっとなるところがあるんじゃないかと思っております。ここにも書いてございます通り、生徒の能力適性や興味関心などを踏まえた学びの実現に課題があるということだったり、普通という名称から画一的な学びの印象を持たれやすいというような課題もございました。このため、今からご紹介する普通科改革というものは、従来の普通科、普通教育を主とする学科ではあるんですけども、生徒や地域の実情に応じた特色魅力ある教育というものを標榜し、充実させていくというような学科を設置できるようにするという制度改正でございます。これは、今まで高校の設置基準上、普通教育を主とする学科としては、普通科しかいけなかったんですけれども、令和4年4月に高校の設置者を改正をしております。この通り、例えば学際領域学科、地域社会学科のように、普通教育を主としつつも、特色魅力のある学びに重点的に取り組むようなことを標榜する学科を設置できるようにしております。公立の学校ですと、令和4年に3校が開校しております。令和5年に追加で7校が開校いたしました。令和6年はより増えていく、恐らく20校ぐらいかなと、私としては期待をしているところな

んですけれども、そういった形で今、各都道府県において検討を進めていただいているところでございます。どんな学科かというのは、今申し上げたスクールミッション、スクールポリシーの数だけあり得るわけなんですけれども、少しわかりやすく類型化をすると、このように学際領域学科とか地域社会学科というようなものが、パターンとして考えられるというところでして、要は地域との連携がテーマですので、地域社会学科についてご紹介をしていくと、現代的な諸課題のうち、高校が立地する地元自治体を中心とする地域社会が抱える諸課題に対応し、地域や社会の将来を担う人材の育成を図るために、現在及び将来の地域社会が有する課題や、魅力に着目した実践的な特色魅力ある学びに重点的に取り組む学科ということでございます。具体的なものは、この後ご紹介する学校の事例を見ていただいた方がイメージが湧くかなというふうに思います。要件は資料に書いている通りでございまして、専門学科のような、かなりハードルが高いような状況にはなっておりません。各学科の特色などに応じた学校設定教科、科目を設けて、高校には学習指導要領上、学校設定教科科目というものが置けるようになってございまして、これを2単位以上設けていただき、それと今回、新学習指導要領で必修修となっております総合的な探究の時間と合わせて合計6単位以上、すべての生徒に対して、原則として各年次にまたがって履修をさせること。それから、地域社会学科においては、地域の行政機関等との連携協力体制を整備すること。それから、関係機関等との連携を行う職員の配置、その他の措置を講じるように努めること。こういったことが設置の要件になってございます。ですので地域社会学科に関しては、この連携を行う職員の配置、この職員をコーディネーターというふうに私ども呼んでおりますけれども、コーディネーターを中心に、地域の小中学校や地域の地元市町村であったり、社会教育機関であったり、高等教育機関であったり、NPO法人、企業経済団体であったり、そして学校とをつなぎながら、地域の社会課題を解決、それを教育のテーマとして取り上げながら学びを充実させていくような学科、というイメージでございまして。こういうところで、高校が立地するその市町村との連携というのが重要になってくるかなと思っております。では、ここからは具体的な学校の事例をご紹介させていただきます。ここから三つは、地域社会学

科を設置済み、あるいは地域社会学科を来年開校予定の学校さん3校でございます。一つが隠岐島前高校、こちらは、岩本委員も非常に関わりの深い学校でございますけれども、隠岐島前高校は令和4年度から、地域社会に関する学科を設置済みでございます。この真ん中ほどに、地域共創 Day というものを記載してございますけれども、1日を使って地域に飛び出して、地域のリアルな現場で実践的、探究的に学ぶ時間をカリキュラムの中に設けることになっていまして、隠岐島前地域ならではの伝統文化の体験や、様々な事業所での探究的实践など、地域を共創する1人として実社会の中で学んでいく、こういったことをカリキュラムの特徴とされています。地域との連携にあたっては、コーディネーターを配置しつつ、コンソーシアムを構築しております。このコンソーシアムの中に、地域の海士町、海士町教育委員会さんが入ってらっしゃるような形になっております。次は長崎県立の松浦高等学校さんです。松浦高等学校さんも令和4年度から学科を設置された高校さんでございます。ここは、学校設定科目まつなび・プロジェクトというものを実施してございます。従来の普通科との違いということで、普通教育に基盤を置きながら、地域社会の諸課題に積極的に関わり、課題発見力、論理的思考力、コミュニケーションなどの資質能力を育成するための科学的な学び、実践的な学びに重点をおく、その時の教材といいますか資源として、地域というものを活用してございまして、第1学年では、まず研究テーマを設定する、第2学年では、校内会で課題研究の実施を計画的に行って、3年生では、個人研修をして地元の小中学生に研究成果を報告する。このようなカリキュラムを構成されています。こちらも地域との連携の体制にあたってコンソーシアムを構築されていまして、地域の松浦市、松浦市教育委員会が入ってらっしゃいます。三つ目が、岩手県立の大槌高等学校さんです。こちらは来年度、地域社会学科の開校に向けて動きを進めていただいています。こちらは、地域社会を舞台に学ぶ実践的な問いから始まるということで、五教科、英国数社理といった普通教科と、それから地域の課題等をかけ合わせたような地域未来学と言う学校設定教科を開講されていまして、地域をテーマに各教科を学ぶという大変面白い学校設定教科を多く開講されています。こちらもコンソーシアムにあたっては、地域の大槌町をはじめ、地域の小中学校、それ

から企業、それから高等教育機関などが、カリキュラムに参画をしているという状況でございます。後半はいくつか、それ以外の事例をお持ちしております。こちらの岡山県立和気閑谷高校さんと、こちらの大分県立玖珠美山高校さんはコミュニティスクールを使って、高校が立地する市町村と連携をしている事例でございます。例えばこの和気閑谷高校さんの場合は、赤囲みをさせていただいておりますけれども、県立の高校さんですが、コミュニティスクールに、地域の和気町、それから赤磐市、それから備前市のそれぞれの教育長さん、町長さん、市長さんがコミュニティスクールに入られるような形で、小中高の接続、小中高生の進路や地域課題の解決、学力向上における地域に根差した接続などを、コミュニティスクールの中で議論をできるような体制を構築されています。美山高校さんも地元の玖珠町と連携をするような形で、この特徴的な活動というところがございますけれども、地域の農業、畜産、林業などの地域資源や、地域の小中学校、大学、商工会など多様なつながりを生かした教育活動というものを、コミュニティスクールというものを起点にして実現をされている学校さんでございます。こちらが最後のスライドでございます。こちらが中学校、地元の市区町村が設置する中学校と、都道府県立の高等学校との中高の連携の取り組みで、私どもが承知をしている事例というものを今回ご紹介を一部させていただきました。それぞれ資料はお目通しいただければと思いますけれども、特徴的な学校設定科目の開講であったり、中学校と高校の合同のイベントの開催であったり、部活動の合同練習、あるいは中学校の教員と高校の教員の相互派遣、チームティーチングのようなものも、いろんな学校さんで行われております。ですから、京丹後市さんにおいては中学校と高校の連携というものを今後進めていかれることを検討するにあたって、このような事例も参考になるかなというふうに考えて、ご紹介をさせていただきます。駆け足になってしまいましたが、私からのご紹介は以上でございます。

座長：どうもありがとうございました。今、私たちが議論しようとしている内容が、非常に関わりが深い事例も含めての考え方もご紹介いただいたかと思えます。どんなことでも結構ですのでご質問等いただければと思いますがいかがでしょうか。

委員：白川さんありがとうございました。スクールミッション、スクールポリシーというものを定めて、自分たちはどういったところを目的としているかを可視化させ、わかりやすくコミュニケーションしてほしいということかと理解しました。学校や地域の人材育成の方向性について、文科省から国としての大まかな指針は示されているのでしょうか。それとも大枠の設定も各地域の学校に任されているのでしょうか。

白川氏：ありがとうございます。もちろん、学習指導要領に基づいてということにはなりますので、学習指導要領で目指しているような学力の3要素、思考力、表現力、判断力であったり学びに向かう力、人間性であったり、こういう基本的な学力であったり、各教科、科目が何を目指していくかというようなところは、もちろん国として共通した考え方があるわけなんですけれども、あくまでそれを最低の基準としつつ、その上で、どんな特徴的な取り組みを行っていくのかとか、どういう生徒に対して、特に受け入れをしていきたいのかということについては、各設置者、それから各学校において考えて深めていっていただきたいなというところです。高校は制度的にはかなり自由なところがございますし、一口に高校といっても、多種多様な生徒さんのあり方であったりとか地域の実情がございますので、そのあたりをよく踏まえた上で、柔軟にというところでございます。

座長：ありがとうございました。他いかがでしょうか。岡田委員、校長としてご質問なり、あるいは感想でも結構ですけれども何かいただけませんか。

委員：高校の代表ということで、この後また話が出てくるとは思うんですけども、都市部におきまして、普通科の設置校が複数あって、その中から選んでいけるというような環境にある学校と、この京丹後市のような非常に限られた学校で、様々な関心であるとか、能力を持った生徒を受入れるという、そういう部分での違いはあるので、なかなかスクールミッションの設定が難しいかなというふうに思いますけれども、先ほどお話がありましたように、京都府の方でも今年度中にはミッションが発表されて、また学校の方でもスクールポリシーの方を設定していくというふうに聞いておりますので、また皆さんに発表ができると思います。

座長：峰山高校がそのミッションを考えていかれる時に、京丹後市とできるだけ連

携していただければということでこの会議があろうかと思えますけれども、その辺りもぜひご検討いただければありがたいというふうに思っております。他にいかがでしょうか。特に地方の具体的な事例もご紹介いただきましたけどその辺りについて何かご質問等ございませんか。この問題も後程もテーマになろうかと思えますので、またその時にご議論いただければというふうに思っています。それでは次に進めさせていただきます。議事の3になりますが、少子化が加速する地域における高校の現状についてということで、岩本委員よりご発表をいただきます。岩本委員よろしくお願いたします。

岩 本 委 員：私の方からは本当に簡潔に、今年度、スクールミッションを府の方と高校と市が連携しながら、策定をしていくということで、それを踏まえてこれからの高校のあり方とかも含めて検討していくということなのかなと思っておりますが、それを進めるにあたってですね、ここまでも STEAM の話だとか改革のいろんな手段とか方向性が見えてきたと思うんですけれども、今日私の方からは、それを総合的に編み込んで、全体のビジョンとか戦略みたいなふうにするためには、とはいえ学校の置かれている現状だとかを完璧に、そして分析的に把握した上で、じゃあ何のために何を優先してやっていくのか、ということを検討する必要があるだろうということで、今少子化が進んでいるようなこういった地域の高校の現状というのを端的に少し見てみるということで、数分お時間をいただければと思っております。先ほど校長先生の方からもありましたけれども、都市部で家から通える学校が 100 とか 200 とかあるような、例えば 23 区とかで、それぞれ行きたい高校に行って、偏差値の高い高校とか、特別支援高校学校があつてとか、専門高校があつてという多様な選択肢があつて、多様な生徒がそれぞれ自分に合った特色ある高校に行くという現状と、地方の公立の普通科高校の、特にこういった少子化が進んでいるところというのは、同じ普通科と言えども全然違うという現状も、やっぱり改めて認識して議論を進めた方がいいかなと思っております。こうした中で、まずこの高校というものが一体どういう機能を有しているのか、というところをちょっとかいつまんでといいますか、主に高校とかでイメージするのって普通教育いわゆる数学の授業とかですね、物理の授業とかいわゆる教科、科目の授業というものをイメージされると思います。これは当然中核にある

機能だと思っています。一方でそれだけではなく、多様な生徒たちが学校には来ています。教育福祉に社会機能とこう書いていますけれども、例えば、生徒によっては授業にちゃんと出て来にくくなっているとか多様な子どもがいます。いわゆる生活指導、生徒指導とか特別な支援とかが必要な子ども中にはいるかもしれないですし、そういう保健とか養護とか福祉みたいな、そういうセーフティネットも含めて、目に見えにくいですけど、ここに重要な形で担ってきているというのも、学校の実際やっている一つの大きな教育福祉的機能になっています。併せて、先ほどの新しい学科とかの話が出てきていますが、各学校、地域の特色を生かした多様な教育、いわゆる総合的な探究の時間だとか、学校設定教科科目でとか、そういう学びも、これからもっと重要だよねと言われている領域があったりとか、そこにSTEMとかテクノロジーとか、その地域の中だけじゃないかもしれないけども、科学技術やエンジニアリングとかいったものを、地域外からでも、そういった知見を持ってきながら生徒たちが学んでいくみたいな領域なんかも、これからの高校教育の中で必要、重要だと言われているような機能だったり学びだと言われています。ですが実際に今どういうことが全国的に起きているのかというと、特に学校の規模が小さくないと、もしくは学級数が減っていくと、まず、教職員の数が非常に少ないという中で、生徒は多様であるという中で、少ない教職員でやらなきゃいけない。そうすると、一人一人の個別のニーズに合わせて、たくさんの科目を設定できればいいですけど、そんなに科目を幅広くは開設できない。同じ数学とかであっても、習熟度ですね、本当に何か国公立ってというようなレベルの数学が必要な求める子どももいれば、場合によっては分数の足し算引き算がまだ厳しいというような生徒さんまで行っている可能性もあるという中で、習熟度別でなるべく細かくやれば、生徒一人一人に合うかもしれないけれども、そんなにクラスを分けるほど教職員がいない、というような実態がこの学習機能を担保するだけでも厳しい。さらに今教職員が非常に多忙だという中で、多様な生徒一人一人に本当はもっと寄り添ってあげたい、向き合いたい。個別の面談だって支援だってしたい。でも、忙しくてそういう教育福祉的機能にも十分時間を回せない。さらに今、探究だとかですね、学校特色の魅力というようなことを言われて、それも頑張って地域

とか関係機関と連携して教員がやろうとしてもなかなかそこまで手が回らない。さらに STEAM でとか科学技術でとか大学とか海外とか今言われても、というような実態がよく起きているというのが現状の中で、じゃあどうしますかというのを、これからの議論の中で理想だけじゃなく、こういった現状を踏まえながら、より魅力のある形というところに行くと思います。最後、その時のポイントは再三今まで出てきたかと思いますが、高校の中だけで全部やろうとする自前主義を超えていく必要があるということで、ですので先ほど白川さんからもありましたけど、学校だけではなく地域のリソースをふんだんに生かし、地域との連携協働体制を持っていてコーディネートする人材も置いて、教員が全部やらなくてもコーディネートできるような体制を作っていくとか、あと前回いろいろ出ていましたけれども、全ての教科科目を全部自分の学校でそろえてやらなくても、今オンライン、遠隔授業だとか場合によっては通信的なものとかも活用しながら、そういったところで共有化できる普通教育の部分なんかは共有して、他の高校と一緒に学び合ったりというようなことをやって、遠隔とかオンラインとかデジタルを活用しながら、それによって教員の余力が出た部分は、教員は一人一人の子どもたちの伴走だとかに向き合って、必要であればつないでいく。つなぎ先は、地域のいろいろな多様な機関、福祉機関もあれば社会教育機関というようなところにつなぐとか、オンラインを使って、必要な学習材、教材だとか様々な部分につないでいくようなところに、より個別最適な学びを実現できるように、そこに寄り添っていけるようなところに、教職員のエネルギーや時間を使えるようにしながら、先ほど人間中心という話がありましたが、学校においては恐らく生徒中心になっていくと思うんですけども、生徒中心、みんなやりたいと思ってもそれができていない現状がある中で、リソースも地域資源を使ったり、オンラインとか他校のものとか上手く組み合わせたりしながら、なるべく生徒中心で出来るような、これからの学校教育の姿を目指していくというのが、ちょっと今までの議論の中でも見えてきている方向性なのかなと思います。最後、蛇足でしたけれども、実態の労働、俯瞰的に見たときの現状課題というようなところを少し紹介させていただきました。以上です。

座 長：どうもありがとうございました。ここで、長井委員がお忙しい中参加いただ

いていまして、15時までというふうに伺っておりますので、ここで長井委員の方から何かご質問なりご意見、どんなことでも結構ですのでご発言をいただければありがたいんですけども、いかがでしょうか。

委員：本日ちょっと限られた時間の出席となり恐縮です。岩本さんのご説明、非常にビジュアルライズが上手で、なるほどというふうに理解いたしました。これについては現状の整理ということで、やはりいろんな面で大変な要素があるのだなということを理解したんですが、岩本さんの視点から結構なんですけれども、これをひっくり返す一番のレバレッジの効くポイントといたしますか、ここをまず第1に介入すべきであるというような、ツボのような仮説はお持ちなのでしょうか。

岩本委員：仮説としてはですね、ちょっとこれは、他の都道府県の高校改革の、どこが進んでいてどういうところが進まないというツボでもあるんですけど、これは恐らく、都道府県立の、今回でいうと府立の高校と、地元市町村がどれだけ本気でタッグを組んでやれるのか、そこに当然地元の産業界とかもそうですけど、やっぱりどうしても自分たちは、例えば都道府県だから、これは市の話でしょうか設置者が違うでしょうみたいな。これ一般的に、往々にしてこうなるんです。市の教育委員会は、私たちは義務教育担当ですから、高校はちょっと違いますから協働できない。で、コミュニティスクールとか学校運営協議会とか言ったって協議するだけ、口も出すけど金も出さない、人も出さないし汗もかかないし、みたいな会議ばかりやっていたでしょう。そんなに学校は良くなるしない、なり難いですね。ここを恐らく府立高校と地元市とか産業界が、本当に目指したい教育であるとか、地域の子どもたちへの資質能力の育成だとか、その先には幸せなその地域づくりか人づくりっていうところにつなげるためにということで、共同体制、タッグを組んで本当に取り組めるのかどうかということだと思います。

委員：分析というか、なるほどそこなのかということも思いました。恐らく本気でということにいろいろな要素が詰まっており、そこがやはりコミュニケーションコストを下げたり、あるいはその何気ないコミュニケーション量を増やしたり、リソースの円滑運用が可能だったりとか、そういったところに落ちていく、その最初の突破口が、本気でビジョンを共有してコミュニケー

ションするといふところのかなという理解をいたしました。ありがとうございます。
ありがとうございます。

座 長：今のところが本当に、私たちが考えている一番のポイントになってこようかなというふうに思いますけれども、ご質問やご意見はございませんか。

委 員：私も今、岩本委員のお話を伺って感じたことを述べさせていただきます。岩本さんは実際の教育現場をご覧になって、先生方が山積する現場の課題にギリギリまで対応されてすでに手いっぱいである状況を、身にしみて感じておられるのだと理解いたしました。そこに、さらに STEAM やアントレプレナーシップといった新しい概念が降っておりてくると、先生方はもうこれ以上はのみ込めない…という状況なのかなと想像いたします。教育現場に身を置かれ当事者として状況を知っておられる方が、こういった会議に参加されることの重要性を私は改めて感じました。そして同時に、では日々現場にいるわけではない私たちにできることは何かと改めて考えさせられました。その意味でも、私たちが自治体と連携して行う Kyotango Sea Labo の価値があると感じております。私たちスカイラボにできることは、世界の国や地域での取り組みに関する情報や研究にアンテナをはりつつ、普段の学校教育とは異なる種類の学びの機会を、日本の地域社会でまなぶ生徒さんたちに提供することだと考えています。教育委員会の先生方とのコラボレーションを通じて京丹後という現場の状況をできるだけ理解し、岩本さんのように現場をよく理解されている専門家の方々の視点に耳を傾けつつ、京丹後で学ばれる生徒さんにとって最適化させていくことが大切だと改めて感じます。役割のすみ分けをしていくことが重要であると思いました。

委 員：まず岩本さんを初めとしまして、島根県の皆様に感謝を申し上げたいというふうに思います。私たまたま平成 26 年、27 年ぐらいに委員会の方に 2 年間ほど行っておりまして、その時に、文科省の方で岩本さんが発表される機会にあらうことができました。丹後地域も非常に過疎化が進み、高校の活性化が非常に手探りの中で、島根県の遠く離れた島が V 字回復をされるような、本当に何か地方に元気をいただけるような取り組みを発表されて、そしてそのコーディネーターという流れがこの丹後の方にもやってきました、京都府の中でもこのコーディネーターを介した高校と、地域との連携というのが進ん

でいる、それは本当に島根県の先進的な取り組みのおかげかなと感謝を申し上げます。

座 長：今お話であったような、本気になれるかどうかというのは、多分やる気の問題ではなくて、本気になれるいろいろな条件もあるはずで、そこに目を向けていくということも大事なんだろうなと感じますし、それは、行政の縦割りの問題とも関わってくるところなので、そこを乗り越える何かがあれば、多分本気になれるんだらうなというのが一つあるのと、あとは多分、人間中心とか、そういう理念のところ、それぞれが本当に深く、実感として感じられるかどうかということだろうと思います。お題目ではなくて、自分自身が実感として人間中心っていうことの意味を、今なぜそういう人間中心ってことを言うことに意味があるのかということを実感できれば、多分本気っていうところも見えてくるような気はしています。だからそういったことを話し合える場があれば、多分その辺もお互いに理解し合えるというか、コミュニケーションできるようになるのではないかなというふうには感じます。

座 長：この問題にも関わると思うので、若狭高校の様子もお話しいただいた上で、またこの問題を考えられたらと思いますので、議事の4の方に進ませていただいて、若狭高校の視察の報告をお願いしたいと思います。事務局、よろしく願いいたします。

事務局：（事務局より報告）

座 長：どうもありがとうございました。視察の内容について簡潔にご説明いただきましたので、何か更にお知りになりたいこと、ご質問等あるかと思いますがいかがでしょうか。あるいは一緒に参加された方で、感想ご発言などいかがでしょうか。

委員：学校経営方針とかビジョンとか、学校経営者がしかるべきビジョンや目標を掲げて、ドライブかけていくというのは非常に重要だと思う一方で、企業の経営でもそうですが、経営者だけがこういうふうにしたいとか、こういうふうにするべきだと言っても、現場がついてこないみたいなことだと、なかなか会社の成長が見込めないのと同じように、教育委員会や学校長が経営者のビジョンを現場にいかについに浸透させ理解してもらおうかということと、企業であれば当然、それが査定に反映したりとか、どうやってあなたはこのビジョン

を達成したのか説明してくださいと、コミットメントに対するレビューがあったりするわけなんですけれども、今回の視察でそこまで見られたかどうかはわからないんですけども、どうやってこういったビジョンを現場の先生方に受け取ってもらって、それをゴールとしてドライブしていけるのかなあというのがちょっと興味があり、もしどなたかご知見おありの方がいらっしゃったら教えていただけないかなと思い質問しました。

座長：ありがとうございます。大事なところだと思いますけどいかがでしょうか。若狭高校の辺りはどんなふうに、先生方がそれを受けとめて実感されているかっていうところの仕掛けみたいなのが多分あるはずなんですけども、その辺り何かありませんでしたでしょうか。

委員：先ほど事務局からもお話があったように、この P4C という考え方が学校全体で共有されているっていうところがあると思います。対話重視って言葉で言うと簡単なんですけど、これは単に先生と生徒の対話だけじゃなくて、今お話がありましたように、学校のマネジメントも含めて、校長先生、教頭先生、それから CEO、それから産業実務家教員、そして従来からいらっしゃる先生方、いらんいろんな皆さん方がこの若狭高校に関わって事業をやっておられるわけですね。そういった中で、この地域のウェルビーイングを実現するためには、やはりこういった P4C のような、こういった対話の考え方が非常に重要であるということ、先生方の方から発議されて、学校全体にそれを広めていくということ、をされているということですね。これは別にマイスターハイスクールの制度でそうしろという話をしていただけじゃなくて、まさに若狭高校の現場にいらっしゃる先生方がそういったことが必要であると感じられて、そして実際にハワイに行ってその考え方を学んでこられて、それを学校に持ち帰って学校全体で共有するという形をとってきている、そういうふうな状況かなというふうに認識しております。

座長：ありがとうございます。P4C、哲学ということですけども、ポイントは聞かなくていいこと、相手の発言、相手が言おうとすることを本気で聞くということ、そういうことだったら安心して話せるっていうことがありますので、それを基本として対話を固めていくということかなと思います。これは小学校でも実践されていることで、そういう発想が広がれば子どもだけじゃなくて、

当然、大人の方もそういう感覚になっていくということで、それが核になっている話かなというふうに思いました。他にはいかがでしょうか。

委員：感想ですけれども、一つはもともと普通科の若狭高校と、そして小浜の水産高校という非常に毛色の違う学校が統合されて、新しい若狭高校になったと言う事なんですけれども、それぞれの強みを非常に生かされた学校だなあというのを感じました。普通科の方では、なかなか探究的な学びというのは、まだ伝統がないといいますか、十分普及はされていないんですけれども、そこに水産高校が持つておられた課題研究であったり、そういう探究的な学びの手法を持ち込まれて、それが非常に学校の中で新しい学びのスタイルを刺激されたなという感じは受けました。それを担保しておられるのは、やはり人脈といいますか、人間的なつながりのネットワークが非常に効果的に力を発揮されていたなというふうに思います。大学の方は福井県立大学の海洋生産学部の元副学長さんが、CEOにということで、本当に大学とのつながりが非常に密に、こういう研究だったらこの先生がいいよとかいうアドバイスをされるとか、また水産系の方では、地元の水産業、また加工業者とネットワークをお持ちの専門学科の先生方がいらっしゃいますので、それぞれの強みを知り尽くした形で、生徒への地域人材をつなげる役割を果たされていたなというのが非常に印象的でした。以上です。

座長：ありがとうございます。峰山高校を今後、より発展させていくための参考とかモデルになりそうなところはあったでしょうか。その辺りはどうでしょう。

委員：私の隣の席には地元の産業界の方がいらっしゃいますので、今日、非常にこういう機会を通して、人的なつながりをですね、今後また生かしていけたらと思っております。

座長：ありがとうございます。他いかがでしょうか。

委員：先ほどの最初のヤングさんの話からずっと続いているんですけど、岩本さんの話も続いて中川さんの話も出てきて、経営方針とかそういうところがどういふうにその現場に具体的に落ちているのかがすごいポイントだと思うんです。視察で若狭高校に行かれてどう思ったのか、そういう3Dプリンタがありましたとか、対話がありましたっていうのは、目に見えている現象だけで

あって、その裏にある哲学がどういうふうに学校現場に落ちているのかというのすごいポイントだと思うんですね。その中で、生徒たちが実際、普段の生活の中でどういう環境で生きているのかというのが、すごくポイントになってくるところがあって、これを話すと本当に、何か校則をつくり直すとかそういうところにフリクションが起こってくるんですけど、簡単に言ってしまうと、そういうふうな対応とか、ものづくりとかを意識した学校環境を作ってみますかというところが、多分中川さんが言ってらっしゃったところのその理念だと思うんですよ。私は私立学校に行って、私の場合は教頭だったので実際にそれをやらないと生徒が集まらないので潰れちゃうんですよ。私がどういうふうにやってきたのかというのをお見せした方が一番早いと思うので、一瞬だけ共有させてもらいます。2018年、私は2016年から教頭をやっていたんですけども、その中でオランダに行った時に、ハンブルグで見せたやつがあるんですけど、それをちょっと共有したいと思います。私は中学校の教頭だったので、学校をデザインする時に作った私どもの学校の廊下なんですけれども、私どもの学校は、think、make、share、要するに考えて作って共有するというのを三つの哲学として作ってしまっていて、デザイン思考もありますが、物づくりというのを学校のテーマにしていました。これは学校の廊下なんですけれども、学校の廊下に授業の中で発表したプレゼンテーションが全部貼ってあるんですね。これが貼ってあることによって、先生たちがこれを見て、他の授業ではこれを行っているんだったら僕も話そう、みたいな感じで授業の内容が共有できたりするんですよ。こういうふうにして、対話を活性する仕組みを授業の中でもっています。あとこのカラフルな机とかイスですね。これは実はこれアスクルで2000円で買った椅子なんですけれども、こういう物を廊下に置くことによって、生徒たちが座って学ぶことができる。またこの机の上にレゴブロックとかいろいろあったりするんですけども、それは教室に上がれない生徒が保健室に行くんじゃなくて、ここでレゴブロックをして遊ぶことによって、先生たちが職員室に通る前に話し掛けて、どうしたの、と会話の場所を作るんです。こういうふうにして生徒が普段から生活する場所をどういうふうにして作るかによって、そのデザイン思考だったり対話がたくさん出てくると思うんですよ。こういう中じ

やないと、基本的にもものづくりっていうのは上手くいかないですよ。ちなみに全部これ 2016 年ですけど、これオーグメンテッドリアリティが入ってしまって、iPad でかざすと全プレゼンテーションが全部出てくるようになってるんですよ。他は全部ホワイトボードになっているので、授業が終わった後に生徒がそういうディスカッションしたりとか、先生が出てきて話をしたりとか、そういうこともできるようになっています。ちなみに 2016 年段階で図書館も全部変えて、図書館は 3D プリンタとか 10 台ぐらいあります。3D プリンタは高いと思われませんが、当時 5 万円くらいで買えましたから高くないんですよ。生徒たちも普通に Adobe とかを使って授業をして、これはメッシュですけど例えばこれがなくなったりとかすると、自分たちで計算して 3D プリンタにモデリングしてこれを作ったりとか、こういうのが中学生は普通に当たり前になってくるんですよ。これは生徒が 3D スキャンしてこれでバレンタインのチョコレートを作ったりとかしているんですけども、こういう日々の生活の中で子どもたちが物を作るのが当たり前とか、挑戦するの当たり前というカルチャーを作っていない限り、結局そういうデザイン思考だとか、外部人材、こういうふうなマインドにはならなくて、スポットの教育になってしまうので、もし京丹後市の教育委員会の方でこういうふうなビジョンを持ちたいと思ったら、実際に学校の現場を自分たちが歩いてみて、この教室環境とかこの空間が本当に自分たちのミッションと合っているのかどうかというのを、まず考えてみるのがすごく重要なんじゃないかなと思います。

座 長：ありがとうございました。学校環境というのは非常に大きな課題でありますので、それもぜひテーマにさせていただければというふうには感じます。工夫次第では、安くていろんなものが買えるというようなことをご紹介いただきました。今のことも踏まえながら、事務局から論点整理のご説明をお願いいたします。

事務局：（事務局より説明）

座 長：ありがとうございました。今日もその論点に関わるような、様々なご意見やご提案をいただいたところもあったと思います。繰り返しでも結構ですので、それぞれの論点について、ご質問やご意見をご発言いただければありがたい

と思いますが、いかがでしょうか。

委員：やっぱり一番大きなところは、京丹後市という地域において、どのような人材像を育成していくことが重要なのかというメッセージに、関係者みんなにコンセンサスが取れていることだろうと感じました。大きな流れや方向性を議論で作り上げて、メッセージを通じてこれから各部署に浸透させていくことが重要だというお話だったと思うんですけども、本日強く思いましたのは、目指す人材像を議論する際に、一つでも多くの声が入っていることが重要だということです。現場をよく知る方の声、日常の現場を知らずとも、違うセクターの視点を提供する声、違う地域の事例をよく知る声など、この話し合いの中に様々な角度から見て異なるボイスがきちんと反映されることが何より大切かと、今回改めて確認をいたしました。北米を中心に実践家・研究者として活動するわたしたちの役割は、京丹後の外で考えられたり実践されたりする教育のあり方を調べて、わかりやすく提供し、地域の専門家と連携しながら最適化していくことだろうと考えています。笠沙座長がおっしゃったことがすごく一つ心に残っておりますが、なにより根本にあるのはとてもシンプルなことであり、それは相手に真摯に寄り添って他者の声を本気で聞く耳を持つ姿勢だろうということです。そんなマインドセットも併せて京丹後の人材育成を考える人たちが、足並みをそろえて人材育成に取り組んでいくことが大切だろうと思いました。

座長：どうもありがとうございました。今ご発言いただいたところを、今回事務局がご提起された論点とすり合わせていくと、例えばそういうメッセージが教育内容の重点化とかそういうところにどう表れているかっていうふうなことにつながっていくだろうと思いますので、そういう形で、具体的な教育内容等を考えていくときに、しっかり私達も踏まえていかないといけないっていうようなところをご提案いただければなというふうに思っております。他に、全く違うような発想でのご意見等ございませんか。

委員：冒頭からヤング委員がご提示いただいた YouTube の TED の動画を僕も見て、結局、コンピューターを使って、ネットワークを使って人と人がつながるから、それをつなぐためにコンピューターがあって、ゴールは人と人がつながってより良い社会を築くことなんだというメッセージが裏にあるのかなと思

いながら見ていて、今回の会議を考えると、子どもたちから京丹後が大好きだと思ってもらうには、単純に例えば久美浜湾を見て、僕は久美浜湾の形が好きなんだというよりも、その地域が好きで、地域で一緒にいる仲間が好きで、働く人が好きで、ということなんだと思うと、人と人をつなげるというのがテーマだとしても、これがなかなかつながりづらかったり、外の人を上手につなげるためにコンピューターが存在するんだっていう、人と地域と人を結ぶコンピューターっていうのが、どうしても私はコンピューターを使うべきだというと、ヤング委員がおっしゃった、STEAMではなくてSTEMの方のイメージがものすごい強くて、何かコンピューター屋さんがコンピューターを触って合理化したいと思っているっていうメッセージが強く伝わる心配が、先生方にとっても、よく教育現場で私は小学校に入るとあるものですから、ビジョンのところに、結局コンピューターが人や地域をつなぐ道具なんだっていうことを強くメッセージとして打ち出し、その糸をつなげるためにコンピューターを上手に使うんですよっていうようなところが、ビジョンで考え得ると良いのかなあというのを、患者あくまでも人間中心、ただ、今コンピューターを使っていない現場の先生方に人間中心って言ったら、コンピューターとかそういうのは要らないんですというふうにならないように、上手にケアしたいなっていうのが1点目と、こういったビジョンを出した時に、これを実現するための具体的なアクションアイテムが紐ついていないと、やや白昼夢になってしまいますし、このビジョンがしっかり浸透していない状態で、アクションアイテムだけをお忙しい先生方に渡すと、もう悪夢になってしまうので、このビジョンとアクションが必ず対になっているという、事務局が、我々のいろんな意見を主な意見として書いていただいて、議論のポイントをこの後アクションにつなげていった時に必ず、この裏にはこういうビジョンがあるんだということを常に言い続けるということが大事だし、アクションプランに落とす際にはまず、ややくどめにでもビジョンをしっかりと皆さんと共有していくことが非常に重要なのかなと思って、今日の議論を聞かせていただいていたいました。

座長：どうもありがとうございました。地域との連携等についてもご意見をいただきたいと思いますが、牧野委員いかがでしょうか。

委員：連携の話は当然大事なので、私なりの意見も後でちょっと申し上げますが、まず今日の話のちょっと俯瞰した話を先にさせていただきたいんですけど、最初に文科省の白川さんにお話していただいたように、岩本さんや私は令和3年の中教審が出した「令和の日本型学校教育を目指して」の議論に参加していきまして、特に新しい時代の高等学校教育のあり方ワーキングは、岩本さんも私も入って一緒に議論してきたんですが、その背景にあったのは、先ほど白川さんから話がありましたけど、高校教育のあり方ということに対して、文部科学省の方で、それまでどれだけ関わってこられたかということに対し、有り体に申し上げるともっと関わってほしいという観点から、ずっと意見を申し上げてきた、そういったことであります。というのは、基礎自治体、市町村の立場から言いますと、やはり高等学校教育っていうのがどうしてもこれまで遠い存在だったということがありまして、先ほど岩本さんから話がありましたように、そこには大きな壁があったんですね。京丹後もそうですけど、都道府県立の高校というのは県の教育委員会の管轄下、それに対して小中学校は大体市町村の教育委員会の管轄下で、それぞれの学校教育において、これをつなげていく、先ほどの連携につながる話なんですが、これは本当に大きな壁があって、どこの地域でもどういうふうにこの壁を乗り越えていくかということについては、かなり苦労していた。文科省として何とかこの壁を、ハードルを低くしてもらえないかという思いがあって、高等学校教育の改革に乗り出した。それが岩本さんなら隠岐島前高校、私であれば飯田OIDE長姫高校になるんですが、地域人教育という形でこれやってきたということなんですね。その時に私自身が感じていたのは、この大きな壁を乗り越えていくのは、やはりなかなか難しいんですね。現場の先生方と例えば市町村の教育委員会とで、今日のようなこういう会議、隣に高等学校の校長先生がいる会議というのは、なかなか当時設けるのは難しかった。そういう中で、高校にもコミュニティスクールという発想を入れていきましょう、ということについても今日もご紹介があったわけですが、様々な形で地域から高等学校に対して連携のアプローチをかけていったというのが、これまでの積み重ねだったと思うんですよね。そうした時に、まさに今日テーマになっています人的なつながり、人的ネットワークというものがとても大事なんだと

いうことは、そうした取り組みの中でも感じてきたんです。一つ忘れてはいけないことは、そうした人的なつながりを個人に委ねるままにしておくと、その人が、例えば転勤でどこかに行ってしまうこともあるわけです。高校の先生はどうしても転勤族という側面もありますので、他の高校に行ってしまうということもあり得るわけです。そういった時に、じゃあその関係性をどう担保していくかということ、やはり考えていかなければいけない課題だと思っております。先ほど出た、若狭のマイスターハイスクールにおいても、説明されております現場の先生方は必ず複数いらっしゃいました。実は地域人教育をやっている私どもの飯田 OIDE 長姫高校も、恐らく島前高校も同じだと思うんですけれども、中心になっている先生が複数いて、1人代わってもちゃんとそこは継続できるということを人的な担保として考えているのは明らかにあると思っております。もう一つはやはり制度的担保です。先ほど京丹後市の教育委員会の方からの論点の中にも出ておりますように、特にその最後の岩本さんから発表された中高連携のあり方における制度的な担保ということについては、これはそうした人的ネットワークの継続も考えた場合、非常に重要だと私は思っています。あの時に岩本さんがおっしゃった、高校と小中の間の壁、まさに県立高校と市町村立の小中学校をそれぞれ管轄する教育委員会の壁というものもあるわけなんです。ここで私はもう一つだけ指摘しておきたいのは、実は中高連携を実現するためには、市自体が一体となってやらなきゃいけないと思うんですね。要は市長部局と教育委員会の間にも昔は壁があったんです。それを乗り越えていこうとする中で、教育総合会議の制度が導入され、そして市長部局側と教育委員会側で一緒になって、地域の人材育成を考えていこうということになったのは、そんなに昔の話じゃないんです。もう本当にここ 10 年の中でそういった制度的な取り組みも全国的にされてきているということがあります。したがって、岩本さんが出されたような高校と小中の連携を果たせるような制度的担保をしていくためには、市自体が、市長部局と教育委員会が一体となってこれに当たっていくんだという確認をしっかりとしていくということが必要になると思います。私からは以上です。

座長：ありがとうございました。ではオブザーバーの塩川さんから発言を求められ

ていますので、どうぞよろしく願いいたします。

オブザーバー: お時間のない中、オブザーバーでございますけど少し発言をさせていただきたいと思います。私は今、国立大学にいる人間でございます。しかも本学でございますけど、高校、中学を設置しているところでございますので、国立大学といわゆる都道府県との連携に関して、少しご説明をさせていただきたいと思っております。もともとご存知の通り、国立大学についても当然、学校自前主義的な発想で取り組まれていたところでございますが、平成 30 年、国の方で新しい法律で、地方創生の観点からは地方公共団体が、国立大学を含めた地域の大学と積極的に協働していこうというようなことが流れとして出てきております。そうしたものと比較でいうと、都道府県高校と地方公共団体、市との連携についても、ある程度真価が求められてきているというのが、今の状況かなというふうに思っておるところで、その点が一つ目でございます。その観点から私自身も、県庁の副知事等と最近細やかな連携をしているところでございます。恐らくこういったものは過去なかったところかなというふうに思っています。二つ目は、私も文科省にいたころにいろいろ考えた中でございますけども、高校と中学校の違いの、すでにご意見出していたところでございますが、確かに学習指導要領が高校についても当然あるわけでございますが、小中学校のように全ての必修履修、授業時間数が教科科目で徹底されているものからすると、大きく柔軟化されております。卒業要件単位も、いわば 74 単位が国で指導要領で決めておるわけでございます。その半分以下がいわゆる必修履修でございます。大学に行くときまさにその指導よりも外れていくというわけで、自由というわけでございますが、こうした高校の義務教育以上に柔軟な教育課程の編成実施しているのが求められているということ、大学についても地域社会のニーズに沿った形で未来からバックキャストしたような教育課程そのものをどうするのかということが、改めてやはり高校には今求められてきているのだろうというふうに思っているのが 2 点目でございます。3 点目は、こうした連携について、当事者同士が、言葉を悪くしますと、なんちゃって的な取り組みではなくて、当事者として主体的に取り組むことが何より求められてきているのだというふうに思っております。地域中学高校を、市・行政との連携、教育委員会との連携といっても、形骸化したものが結構あるのが実態かなというふうに思ってお

ります。自分自身は大学に来てもそういったものもあるかなというふうに思っております。そういったものではない取り組みをどう進めていくのが肝心なところかなと思っております。さらにその上で最後4点目ですけど、それをどうそれぞれの地域のニーズに合った形でシステム化を図っていくかが、恐らく極めて重要な話かなというふうに思っておりますので、そういった観点でこの議論の方が進んでいくといいかなと思っておりますので、発言させていただいた次第でございます。私からは以上でございます。

座長：ありがとうございました。岩本委員からもご発言があるということですので、よろしく願いいたします。

委員：私の方からは、今日を振り返って、私のパートで少し質問いただいた時に、本気で協働できるかどうかというのが、恐らく重要じゃないかということをおっしゃっていただいて、本気でってこの抽象的な言い回しは一体何なのかとちょっと自己反省をして、その時のポイントは何だったんだろうかと、もう一度今振り返って考えてみましたところ、一つはまず本気で主体的な参画の意欲を高めるときに改めて重要なのは、何度も出てきています危機感とビジョンの共有。なぜ今これを、高校側も市も地域挙げてやる必要があるのか、危機感、これしないと何か悪いことがあるのかみたいな、このままだと何か悪いんだっけみたいなところや、別に悪くなくても、こういうビジョンだったら、こういう方向性なら本当に生徒にとっても、地域の未来にとっても良いよねっていう、やっぱりそこをちゃんとビジョンをしっかりと共有するところ、こういう場でそれを正に議論していくということだと思うんですけども、それを前提とした上で、ビジョンとアクションっていう話があったかと思いますが、そのアクションに伴うところ、もう一つその本気を測るものって、リソースと責任をどれだけ共有できているのか、拠出しているのかに近いかもしれないんですけども、一つはやっぱりお金の部分だと思います。これはなかなか高校側に求めにくいものですが、例えばですけど、市の側は高校生の教育にどれだけの市のリソース、お金も含めて投入してやる気があるのかということ。もう一つはその表れとしての人の理想、人をどれだけですねここに貼ったりするのかということ、先ほど視察の話もありまして私が行ったところでもそうですが、CEOという名前ではなか

ったですけれども、学校経営補佐官という形で、県立高校の中に市町村側から2人とか経営補佐官を入れて、コーディネートする人材も入れて、人を貼ってちゃんと共同していくってところ、当然お金もかかりますけれども、そういう、人まで入れるっていうぐらいの本気度というか、金、そして人ですね。三つ目は時間です。例えば、いくつかも市町村側で県立高校と一緒にやっていくフィールド時間を、ともに作っていくってことやったわけですが、例えば学習センターという、放課後や土日の学校が補習とかをやっているようなところを、ここを市町村側がその機能を担ってやっていくような場とか、放課後土日にの学びの時間を、市町村側と一緒に、もしくは主体になってやっていく。あと部活動とかでも、人つなぎ部とかで地域国際交流部とか、何かそういうものを作って、その地域の課題解決やっていくとか、そういう部活動的な機能と、あとは寮、寄宿舎的なものを、これも市町村側が作ってそこに寝泊まりする、高校生たちにその学びの機会をみたいなことでも市町村側がやって、あと教育課程の中で学校設定教科科目をいろいろ作って行って、そこは一緒にやっていく、もしくは隠岐島前高校でいったら地域共創学科という学科です、普通科の中に学科を作ってですね、競争で1日丸々探究DAYみたいな時間を設けたりとかしながら、こういったところは、市町村と高校と一緒にやらないと運営できないような形で一緒にやっていく領域とかをしっかりと作りながら、そこにお互いでリソースと責任を持ち合いながらやっていく。そこら辺がどの程度の本気度で共同でやるのかの一つの指標というか、高ければいいということではないと思うんですけれども、表れとして見えてくるころかなと思いました。

座長：ありがとうございます。現地でおられる、地元の企業の皆さんとか、地域の方の声もちょっと伺いたいので、事務局の方にお任せしますので指名をしていただいでよろしいでしょうか。

事務局：はい。まず田茂井委員の方から手が挙がりましてお願いします。

委員：今日いろいろ話を聞かせていただきまして、先ほども感想を述べさせていただきましたけど、スキーム教育なんですけど、僕はあれが丹後に根付くことをすごく希望しています。やっぱり語学力であったりとか、自分からの積極的な発言だとか、先ほど申し上げた通り去年参加させてもらって、本当にすごい

など思っています。我々もいろいろ海外に行ったりする機会があっても、そういうところで一言も英語も喋れないというので、コミュニケーションができないというのはすごくハンデを感じていて、やっぱりそういうところで、しかも言葉ができるっていうことは積極的にいろんな発言ができていく、コミュニケーション取れていくってなってくると、そういう知識を持った子どもたちが増えていくというのは、すごくこの丹後にとっては大事なことかなと思っております。去年は中学生ですよ。中学生や高校生らも交えていけるようなふうに広がっていくと、すごく丹後にとっては力になるのではないかなと思っております。また岩本先生の話の中で、制度としてあるんでしたら、本当に例えば網校にいながら峰校の授業が受けられるとか、予備校の人気講師じゃないですけど、この先生の授業が受けたみたいなの、そういう特化したことだとか、学校間を飛び越えて授業なんかができる時代でもあるのかなと思うので、そういうことが本当にできていくと面白いと思いますし、例えばクラブなんかもそうでしょうし、今回、網高と宮津高校が組んで野球をされていましたが、丹後って割と能力の高い子どもたちが多いので、ちょっと長期ビジョンで、例えば野球部は峰校に置いて、そこに今、結構都会の私立高校に行っている生徒もいるので、そういうことを集めていくと本当に甲子園が目指せる可能性があったりすると思いますし、何かそういうことができれば面白いのと、やっぱり我々の産業界としましては、その丹後のこの仕事の魅力を知ってもらいたいということもありますので、小学校の生徒さんは丹後学というのがあって、うちにも工場見学に来られますけど、本当に中学校、高校なんかでも、丹後のものづくりだとか、いろんな産業の魅力を感じてもらえるような授業があって、また丹後に戻ってきてそういう仕事に就いていただけたらとか、高校の場合は京都府立なので、例えば京都府の織物機械金属振興センターという節もありますので、そんなところで織だとか、機械金属の仕事だとか、そういう産業の授業を受けるようなことの科目があってもいいのかなと思います。とにかく丹後愛を育むような授業ができていくといいなと思いますし、都会に出ていろんな知識を得た人達がこの丹後に帰ってきてくれて、それを受け皿として我々がいる、みたいなのところできていくと非常に良いのかなと思っております。

座 長：ありがとうございました。あともう1人ぐらいお願いいたします。

事 務 局：では会場からもう1人お願いして、今度校長先生よろしいですか。

委 員：以前、丹後教育局が行っています、丹後子ども未来プロジェクトという地元企業の方々とか、峰山高校さんの今の機械創造学科の生徒さんに来ていただいて、これは私はちょうど大宮中学校にいた時ですけども、プログラミングの講座を、中学生を相手に高校生の皆さんに来ていただいて教えていただいたことがありました。とても子どもたちが興味を持って、やっぱり憧れの高校生から、自分たちが知らない世界、知らないことを教えていただくという、学びの深さをすごく感じたということがありました。ただ残念だったのが、これがやっぱり単発なのでなかなか継続しない、地元企業の方にも、中学校現場とか小学校現場に来ていただいて、タンゴ技研や日進の方だとかに来ていただいて講座をしていただいて、子どもたちもとっても興味関心を持つんですけど、やっぱり単発でしかないというところから、昨年度、本校の生徒もこのSea Laboに参加させていただいたんですけども、やっぱり何回かのシリーズもので、高校生と一緒に深い学びをするというところは、本当に強い刺激を受けて帰ってきて話を聞かせてもらったところなんです。そういうところで、是非やっぱり中高連携というのはものすごくやっぱり魅力があるなど、京丹後市が保幼小中一貫を取り組んでいて、そこでの取り組みも随分と充実してきました。やっぱりこれは地域コーディネーターであったり、保幼小中一貫教育のコーディネーターを配置していただいて、小と中、保幼と小、保幼と中が、やっぱりつながることで今までなかった教育活動が推進できているというところと言うと、中と高のつなぎをしていただけるような、そんなコーディネーターの方が配置していただけたら、大変魅力的だと思います。やっぱり単発で終わらずに、常日頃から中学校が高校の生徒さんと交流、それから学ぶ機会をともにする中で、大きな深い学びをやっぱり実現するだろうなど。そういうところと言うと、やっぱり総合的な学習の丹後学なんかは物すごくやっぱり魅力的だろうというふうに感じます。高校でのこの活動が、ぜひ中学生と生徒にも、何かいろんな機会でも、聞いたり見たり一緒に学ぶ、そんなつながりが持てていければ、すごく広がっていくなと感じたところが1点です。それから、さっき論点の中にありました、遠隔特例校制

度、10 ページですけれども、遠隔教育特例校制度は大変魅力的だなと思って
います。特に、市内 6 中学校あるんですけれども、小規模の学校になると専
科の先生がいなくて、家庭科の授業を体育の先生が持ったりだとか、なか
なか先生がいない実態がある中で、本当の専門の学習をするというところに、
この A 中学校の免許を持っている先生の授業を B 中学校で配信して授業を受
けるとかいうところは、かなり現実的であったり実効性がある、そういう制
度だなというふうに思います。是非こんなことが実現できたらなと、実際に
今は美術を兼務で持っておられる先生や、そういうところがまた課題として
クリアできて、子どもたちの学びが深まっていくかなということを、これを
聞かせてもらって感じました。以上です。

座長：どうもありがとうございました。59 分ということであと一分となってしま
いました。次の子どもの声のところは、すいませんけどまた事務局と相談させ
ていただきますが、メール等でご説明いただきました意見を集約し、もし時間
的に必要であればそういうことをしていただいて、次回 7 月も予定されてい
ますので、可能であればそこに回していただければというふうに思っており
ます。また本日は、地元の方のご意見をもっと伺う時間があれば、さらに議
論が深まっただろうと思いますので、ぜひ次回はそうしたご意見を、冒頭で
もいただくような時間もあっていいのかなというふうに今日感じました。一
応 16 時になりましたので、事務局の方に私からお返ししたいと思います。

事務局：笹沙座長ありがとうございました。座長からありましたように、子どものア
ンケートについては、後程メールでご意見等いただければと思いますし、そ
の他、今日議論がありました内容につきましても、十分ご発言いただけなか
った方もあるかと思しますので、ぜひメール等で後ほどご意見いただければ
ありがたいと思います。資料の 7 の方はまた後程ご覧いただきまして、今後
の予定ということで、次回、第 3 回を 7 月 10 日で予定しておりますので、ま
たそれ以降につきましてもよろしくお願ひしたいというふうに思います。そ
れでは最後、少し駆け足になりまして申し訳ございませんでした。時間にな
りましたので以上をもちまして第 2 回の教育人材育成のあり方に関する検討
会終了させていただきます。委員の皆様大変お忙しい中ご出席いただきまし
て最後までありがとうございました。以上で閉会といたします。